

令和 6 年度研究テーマ

見通しと振り返りの往還による授業改善
～「思考力・判断力・表現力等」の評価方法の充実～

I 設定理由

三観点

「知識・技能」

「思考・判断・表現」

「主体的に学習に取り組む態度」

①粘り強い取組を行おうとする側面

②自らの学習を調整しようとする側面

石井英真 全体編集

「ヤマ場をおさえる 単元と評価
課題・評価問題」より

平成 28 年に中央教育審議会から出された答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」では、育成すべき三つの資質・能力が示され、その三つの資質・能力をバランスよく育成するために行う改善の重点として「カリキュラム・マネジメント」、「主体的・対話的で深い学び」、「学習評価の充実」が挙げられた。その重点のうち、「学習評価」については、平成 30 年 1 月 21 日の中央教育審議会初等中等分科会教育課程部会において「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」が取りまとめられ、学習評価が「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して各教科における資質・能力の育成をする上で重要な役割を担うものであると示されている。また、令和 3 年度『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」では、「個別最適な学び」をいう言葉も打ち出され、教師だけでなく、生徒も自身の資質・能力を適切に捉え、それに対して最適な学びを選択できるような学校教育の在り方を模索していく時代となっている。教育現場において、学習評価に期待されている役割は大きく、本校を含め、教育現場全体が取り組むべき課題となっている。

特に、現場における評価の方法については、三つの資質・能力と対応する三観点による観点別学習状況の評価を行うこと、それぞれの観点に合わせた評価方法の工夫改善が必要であることが示された。このことによって、現場で対応に追われたのが「主体的に学習に取り組む態度」である。「主体的に学習に取り組む態度」の二つの側面をいかに見とるのか、それを説明責任に耐えうるものにできるのかなど、さまざまな疑問と不安が現場に混乱を生じさせている。「主体的に学習に取り組む態度」の評価には、大きな変革は求められているが、評価をそこにのみ終始するべきではない。石井（2023）には、次の指摘がある。

今回の学習評価改革の焦点を主体性評価に見いだすのは改革の読み方として一面的で、その捉え方では評価をめぐるさまざまな困難が解決されず、むしろ行き詰まってしまうでしょう。観点別評価の本丸は「思考・判断・表現」の充実です。まずそこにフォーカスすることによって、困り感のある主体性評価についてもより妥当な運用の仕方が見えてきます。

「主体的に学習に取り組む態度」は、「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」を身につけようとする中で、粘り強い取組と自らの学習を調整しようとする姿を見とることが必要である。それは、各教科が育成すべき「思考力・判断力・表現力等」を明確にし、その育成を可能にする活動を設定し、さらに、その

評価方法を充実させていくことが重要である。

そこで、まず、本校では、「思考力・判断力・表現力等」の評価方法の工夫を軸とした授業改善サイクルの構築を目指していく。

II 具体的な取組内容

パフォーマンス課題
リアルな文脈の中で、
様々な知識やスキル
を応用・相応しつつ何
らかの実践を行うこ
とを求める課題。
評価のためには、基準
となるルーブリック
の作成が必要。

現在、「思考力・判断力・表現力等」を育成し、見取るためのさまざまな方法が提示されている。特に、「思考力・判断力・表現力等」の性質から、実際に思考、判断し、表現する活動の設定は必須であり、評価の妥当性を満たすためにもパフォーマンス課題を用いた評価が推奨されている。しかし、パフォーマンス課題の定義を十分に満たした実践を行うとなると、その煩雑さから現場における実行可能性が低く、普及しているとは言えない現状である。「思考力・判断力・表現力等」に評価について、実行可能性を踏まえて検討し、現場に即した評価方法の工夫を行っていききたい。

そのために、以下の4点について取り組む。

【教科部会の中で】

(1)教科ごとの『見方・考え方』、そして、それを発揮した『思考力・判断力・表現力等』について深める。授業改善イメージを作成し、年間を通した教科内で授業改善の方向性を示す。

【日々の授業実践の中で】

(2)育成したい『思考力・判断力・表現力等』を明らかにした単元プランシートを作成し、実施する。その際、次のことを定めておく。

- ①単元で育成したい「思考力・判断力・表現力等」が発揮される活動（評価場面）
- ②「思考力・判断力・表現力等」を見とれるもの（評価材料）
- ③B・Aの評価基準（CはBに満たないもの）

(3)振り返りを行う。ワークシートの記述や学習者の言葉（アンケートでも可）を基に、①～③が適切だったか検証する。評価したものは、学習者にフィードバックする。

(4)次の単元へ活かす ※年間計画（教育課程）の中で調整を行う

III 成果と課題（今後の展望）

研究テーマを改訂し、一人一実践で校内授業研究を行ってきた。その中で成果は、次の3つである。

(1)「思考力・判断力・表現力等」の育成を意識した単元構想と教科を超えた力としての意識
各教科「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」の区別を考え、知識の広がりや深まり、技能の熟達ではなく、どう考え、どう判断しているのかを思考を意識した単元を構想し、実施しようと試みた。また、授業後の研究会では、「思考力・判断力・表現力等」が教科を超えた汎用性の高いものであることを認識し、各教科の実践を自身の教科へ活かすこともできた。

(2)育成と評価を可能にするワークシート等の重要性の認識とその工夫

「思考力・判断力・表現力等」を評価するためには、その見取りを可能にする「もの」が必要となる。特に、思考・判断は可視化しなければならない。そこで、「思考力・判断力・表現力等」の育成と評価を可能にするワークシートやノート、スラ

イドなどが重要であることを認識し、工夫を行うようになっている。

(3)評価基準B・Aの具体の蓄積

これまで、B・Aについては、その判断の基準が文言としては示されていても、実際の生徒の記述を示したものは少なかった。今年度は、その具体を示したことで、より評価の基準が明確になってきた。その中で、次のようなB・Aの設定が考えられている。

○数による設定…根拠が○個挙げられていればB・A

○質による設定…同学年の指導事項の中で、より高次なものをAとする。

上級学年の指導事項をAとする。

「思考・判断・表現」する際に用いた「知識・技能」の難易度で設定する。

成果がある一方、課題も多く見えてきた。今度は以下のことに取り組んでいく。

○教科研究の充実を図る。

「三つの資質・能力」「見方・考え方」について、教科内での一貫性について

教科によって、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」の区別が明確になっていない実践もある。そのため、評価基準の設定が思考の広がりや深まりではなく、知識の広がりや技術の熟練度になっているものもある。来年度は、より「思考力・判断力・表現力等」とは何か、その育成のために、どんな活動を設定しているのかを考えていく必要がある。また、上記したように、「思考力・判断力・表現力等」は教科の枠を超越する汎用性の高い力である。だからこそ、「思考力・判断力・表現力等」をその教科特有のものとしめるためには、各教科の「見方・考え方」を働かせることが重要である。よって、教科の「見方・考え方」とは何か、それが働いた「思考・判断・表現」とはどういうものなのかを、教科内でもう一度、考える必要がある。

加えて、教科全体で授業改善を図っていくために、共通した活動の設定、共通したワークシートの使用などから、効果を実証するなど、教科内での取り組みに一貫性が必要である。

○「思考力・判断力・表現力等」を働かせることができる学習活動の設定と「思考力・判断力・表現力等」を可視化できるワークシート等の作成。

今後も、各教科で明確にした「思考力・判断力・表現力等」を働かせることができる学習活動を計画すること、そして、その「思考力・判断力・表現力等」を働かせるために必要な「知識及び技能」をそれまでに計画的に身につけられるようにしておくことが必要である。

また、評価するためには「思考力・判断力・表現力等」を可視化できるワークシート等の作成と検討が引き続き必要である。それを教科内で連携して行えるよう、年間計画の段階で、ワークシートにおける課題を明確にしておくことができるようにする。

○育成を目指す「思考力・判断力・表現力等」に合ったB・Aの設定方法の検討。

これまでに取り組んだ基準の設定も含め、今後もさまざまなパターンを考え、指導事項にあった設定方法を検討していく必要がある。その中でも、「思考・判断・表現」の中で用いた「知識・技能」の難易度の違いでB・Aを設定することや、「知識・技能」の難易度は考慮せず根拠の個数のみでB・Aを設定することなどは、授業研究会の中でも、議論となった。先行事例を収集しつつ、検討を重ねることで、「思考・判断・表現」の基準となるのかを考えていく。

○これらを、日々の授業実践から行うことで、「指導と評価の一体化」を図る。

本年度は、前期と後期のそれぞれで1実践行うことを目標に取り組んできた。しかし、本来であれば、教科で定めた授業改善の方向性に従い、日々の授業実践の中で、

- ①単元で育成したい「思考力・判断力・表現力等」が発揮される活動（評価場面）
- ②「思考力・判断力・表現力等」を見とれるもの（評価材料）
- ③B・Aの評価基準（CはBに満たないもの）

明らかにした単元プランシートを作成し、実施する。そして、ワークシートの記述や学習者の言葉（アンケートでも可）を基に、①～③が適切だったか検証するという、授業改善のサイクルを回し続ける必要がある。研究紀要のための実践収集ではなく、自身の授業改善のための実践の積み重ねを行っていききたい。

○学習者が自身の学びを俯瞰し自己調整する方法を検討する。

「思考力・判断力・表現力等」の育成と評価の研究を経て、今後「主体的に学習に取り組む態度」の育成と評価の研究へと進めていきたいと考えている。「主体的に学習に取り組む態度」の二つの側面、①粘り強い取組を行おうとする側面と②自らの学習を調整しようとする側面の育成のためには、自らの学びの省察（メタ認知）と省察を基にした自らの学習の調整、この2つの機会と方法を提供する必要がある。機会については、時間ごとや単元ごとの振り返りの時間を設定することで確保できているが、方法については、俯瞰し省察を促すもの、今後の学習の自己調整を行うものとなっているとは言い難く、その前段階として、授業者側の評価と学習者の自己評価の乖離も課題である。

R6公開研の石井先生の講演会では、次のような指摘があった。

学校評価改革を進めていく上での羅針盤

・「間主観性」を評価（改善）・評定（説明責任）の在り方を見直す（事例をもとに子どもの見る眼を育て、評価結果の納得感をつくる）。

この指摘のように、省察し、自己調整を行っていくためには、学習者自身の見る眼を育てることが必要である。よって、来年度は、これまでの実践を継続しつつ、単元のスタート時点で評価規準・基準を提示すること、基準を学習者と作成することや評価のフィードバックを適宜行うことに取り組み、学習者の見る眼を育てていきたい。